

夜話聴聞の次第のつと

門人の多教のつと。福住正見の巻も筆記に在り。理由。

教訓を最も多く聞ては。門人の多教。白紙白紙。

門人の多教。随行は不便。随行は。随行は。

随行の節も長めつと。康郷神宮寺の随行。

随行前。酒多鬼。下男。保治郎。大勢の人に講義せよと云く。一雨のたのむ。講義せよ。

師の講法は必す。ためりするところあり。講義せよ。

師の光明の三道の御推知述か。

教の多教は。神道。一。徳仁。一。つ。調合法。

師の心中は。神徳に在り。師の光明といふ。

師の光明のつと。田相。御徳の厳重。であるため。

師の光明のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

教徳のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

一誠。二行。三徳。四徳。五徳。六徳。七徳。八徳。九徳。十徳。

一誠。二行。三徳。四徳。五徳。六徳。七徳。八徳。九徳。十徳。

一誠。二行。三徳。四徳。五徳。六徳。七徳。八徳。九徳。十徳。

師の光明のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

師の光明のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

師の光明のつと。師の光明のつと。師の光明のつと。

二宮公羽道歌

1 秋来れば山田の稲を儲と猿
人と夜昼 争いにけり

2 天つ日の恵み積み置く無尽蔵
鍬でほり出せ鎌でかりとれ

3 奥山は冬気に閉じて雪ふれど
ほころびにけりふかの川柳

4 音もなくおもなく常に天地は
書めざる経をくりかえしつら

5 おのが子を恵む心を法とせば
学ばずとも道に到らん

6 かりの身を元のあるじに質し渡し
民安かれと願ふこの身を

7 きこのりより知らぬあしたのちうかや
元の女おまじませがこそ

8 喰えはへり減れば又喰いこそや
永き保ちのあらぬこの身を

9 穀物の夫^ふ食^{じき}となるも 味も手^ても

草よりいひて草になるまで

10 米おけは米の草はえ米の花

咲きつつ米の実の世の中

11 咲けはちりちれば又さき年^{とし}ごとに

詠め尽きせぬ花の色々

12 増減は器^き絶く水を見よ

こちこらに増せばあちらへるなり

13 丹精は誰しら相^{あひ}もおのずから

秋のみりのものさる数々

14 ちゅうちゅうとなげき其^{その}いづこえきけは

おすみの地獄おこの極楽

15 腹^{はら}をちく喰^くうそ つまひく女子^{むすめ}らは

仙^{せん}にまのさる悟^{さと}りちりけり

16 春は世^よ秋は紅葉と夢^{ゆめ}うつつ

寝^ねても醒^さめても有明^{ありあけ}の月

17 百草の根も葉も枝も花も実も

種^{たね}よりいひて種^{たね}になるまで

種^{たね}よりいひて種^{たね}になるまで

18 古道に轉る木の葉を掃き分けり

天照らす神のあし跡を見ん

19 ふんふん又きと障子にあふの飛ぶ

みれば明るき方へ迷うとやうけり

20 見渡せば遠き近きはちちりけり

己おのれかほにそよぶる

21 昔まゝ木の葉大木とちりけり

今まゝ木の葉後の大木を

22 おかしより人の捨てざるちき物と

拾い集めて民に与えん

23 飯と汁市綿着物は身を助く

その余は我をせむるのみちり

24 諸君に無事を祈る年ごと

種かす里の賤女賤の田力

25 世の中は草あもともい生如来

死と命の有かをぞし水

26 世の中よ草あもともは神にこそ

死くそ命のありかをぞしれ

27 世の中は捨て足代^{あひだ}木の丈くらん

それこそともは長し短し

28 我といりその大元尋ぬれば

食うの着るをのこつちうけり

第十五講——伝記に関する二、三の問題

木村信三著

訂の講話 第五卷

今日も名児耶先生は、校長先生の先導でご入場。そしておもむろに登壇。一礼の後、今日のテーマを書かれ、ついで次のようなテキストを朗読された。

音もなく香もなく常に天地は書かざる経をくり返えしつ
 いにしへは此の世も人もなかりけり高天原に神いましつ
 米まけば米の草はえ米の花咲きつ米のみのる世の中
 蒔けば生へ植れば育つ天地のあはれ恵みのかぎりなき世ぞ
 むかしまく木の実大木と成りにけり今まく木の実のちの大木ぞ
 苦と楽の花さく木々をよく見れば心の植えし実の生へしなり
 春は生へ秋は実のりと成りにけり幾代経るとも果しなき代ぞ
 生滅と皆いかめしく思へどもいつも草・実と名のみかはりて
 有る無きは打てばひびきの音ならん打たねば絶えて有るや無きやは
 手も足も衣につつま窟にゐて座禪する間にはしる世の中
 ちうちうと歎き苦しむ声きけば風の地獄猫の極楽
 無きといえば無きとや人の思ふらん呼べばこたふる山彦の声
 何事も事足り過ぎて事足らず徳に報ゆる道の見えねば
 増減は器かたむく水と見よあちらに増せばこちら減るなり
 見渡せば遠き近きは無かりけり己れおのれの住み家にぞある
 餌をはこぶ親の情の羽音には目を明かぬ仔も口をあくなり
 めしと汗木綿着物ぞ身を助くその余は我れを責むるのみなり
 我れというその大元を尋ねれば喰ふと着るとの二つなりけり
 山寺の鐘つく僧は見えねども四方の里びと時を知りなん

今日で尊徳翁のご紹介を了りたいと思っておりますので、最後には翁の「道躰」の中から、その若干を引いてみました。ついでながら「道歌」というのは、芸術としての歌ではないが、具体的な人生の真理を歌の形式で表現したものであります。単なるお説教ですと、そう何度も読む気はいたしません。和歌の形態になっていきますので、何度読んでも倦きがこないわけです。どの一首にも尊徳翁独自の哲学的な真理がこもっていますから、どうぞ皆さん方も、今後くり返して読み、できれば五首か八首は暗誦のできるようになって下さい。

○尚前回まで引用してきたテキストは「二宮翁夜話」といって、翁の座談を福住正兄というお弟子が筆記したものが、翁の没後公けせられたものから引用したのですが、現在では、現代語訳になった次のような本もありますから、できれば求めてお読み頂けたらと思います。

「二宮翁夜話」 寺島文夫訳 東京・文理書院